

第5章 迷走

第一節 AMES 種

2001年10月25日、米国・国土安全保障省(DHS)のトム・リッジ長官はフロリダ、ニューヨークおよびワシントンで発見された炭疽菌は Ames 種であることが判明したと発表した。ワシントン・ポスト紙によればダッシュル上院議員宛ての手紙に入っていた炭疽菌は洗練された技術によって化学物質を加え細かい粉末状にしてあったという。このような炭疽菌を作ることが出来るのは米国、イラク、あるいは旧ソ連であるが、イラクあるいはロシアから来た菌である可能性は低い、と同紙は述べた。それに比べNBCニュースやニューヨーク・ポストに送られた炭疽菌はやや粗いものであった。

リッジ長官の発表直後には Ames 菌はアイオワ大学に保管されていた菌であるとの情報が流れ、アイオワ大学は押しかける報道関係者への対応に苦勞した。しかし、2002年1月にはいると、FBIや科学者達が Ames 種についての情報を調べ上げ、この菌の発祥地はインターステート35とハイウェイ30がぶつかる場所にあるアイオワ州の田舎町エイメスではなく実はテキサス州であることが分かった。ⁱ

炭疽菌はそのDNAから類別され名前が付けられている。現在は89種類の炭疽菌が知られている。米国陸軍は1981年にワクチンをテストするために、新しい種類の炭疽菌を入手した。この菌は1985年まで名前がなかったが、フォートデトリックの陸軍伝染病研究所が論文を発表する際に Ames という名前を付けた。と言うのはその菌の培養器の送り状に、返却先としてアイオワ州エイメス、国立獣医研究所というラベルが貼ってあったからだ。ⁱⁱ 生物兵器の歴史は非常に古く、カルタゴのハンニバルが蛇毒を詰めた壺でペルガメノンの船を攻撃したという記録が残っている。近くでは第二次世界大戦中に、日本軍731部隊が中国で生体実験を行なったことが知られている。ⁱⁱⁱ

米英及びカナダは日本とドイツの生物化学兵器に対抗するためとして1941年に生物化学兵器の開発を開始した。その結果炭疽菌とボツリヌス菌の兵器化に成功したのである。そのときの米国の開発センターがマリランド州フォートデトリックの施設であった。英国は1942年グリナード島という小さな島で生物化学兵器の実験を行なった。八頭の羊を放し、炭疽菌の詰まった爆弾を投下したところ、数日で羊たちは死んだ。以後島は炭素菌で汚染

され、人が近づけなくなっていたが、1986年から1990年までの間に、2平方キロの島に280トンのフォルムアルデヒド溶剤を散布し検疫に成功した。^{iv}

炭疽病という病名は死体に傷が付くとそこから黒いねばねばした血液が流れ出ることから付けられた。炭疽菌は「芽胞」というたんぱく質の殻に包まれた状態を作ることが特徴で、芽胞になると栄養分がなく低温という環境で、何年でも生存できる。芽胞を8,000～9,000個肺に吸い込むと非常に致死性の高い肺炭疽病になる。

米国はフォートデトリックにある陸軍伝染病研究所で生物化学兵器の研究を行い、朝鮮戦争（1950-1953）で広範囲な生物兵器実験をおこなった。その後1972年に生物化学兵器条約に署名し、一切生物化学兵器の開発と生産を止めたことになっている。

1992年に湾岸戦争が起こり、帰還兵の中に化学兵器の影響を受けたと思われる症状を表わす者が出た。そこで1994年に上院の「金融・住宅・郊外開発」委員会が生物化学兵器に関する聴聞会をおこなった。この委員会は「輸出管理法」を担当しているために、米国からイラクへの生物化学兵器輸出の可能性について調査したのである。

委員会は商務省に対し湾岸戦争以前に、米国からイラクへ輸出された微生物についての情報を提供するよう求めた。すると1985年から湾岸戦争時までに炭疽菌、ボツリヌス菌、カプスラーツム・ヒストプラズマ菌、ブルセラ菌、クロストリディウム菌が米国からイラクへ輸出されていたことが分かった。いずれの菌も毒性の高い、生物兵器となりうる菌ばかりであった。^v

イラクはクエートへ侵攻する以前にアラブ世界では最も高度な生物兵器開発プログラムを持っていたと思われる。イラクの生物兵器開発は1970年代から始まり、1989年にはバクダッドの四施設で大規模な生産が行なわれ始めたことも確かめられた。だが、発見された炭疽菌入り手紙のイスラム系テロを匂わす文言や、上記のようなイラクの状況があったにも関わらず、FBIは早々にAmes種の炭疽菌の出所は米国内であると判断したのである。この判断をどうして下したかを、FBIは明らかにしていない。

第二節 ハーバード大学教授の失踪

炭疽菌入りの手紙が発見されるおよそ二週間前に、FBIに無記名の一通の告発状が届いた。それには以前フォートデトリックの陸軍伝染病研究所で働いていた、エジプト生まれの科学者アヤード・アサドが反米の狂信者で、バイオテロを企んでいるという内容が書かれていた。彼は1997年にフォートデトリックの研究所を解雇されていた。告発状の内容はそれを書いた人物がフォートデトリックに精通していることを示していた。FBIはアヤード・アサドを取り調べたが、告発状の事実はないとして彼を釈放した。

彼がフォートデトリックで働いているとき、陸軍中佐フィリップ・ザックとその仲間はアサード博士に悪質な中傷をし、彼を研究所から追い出そうと図った。ザック中佐はユダヤ系であった

為に、シオニストがアラブの犯罪に見せかける為にこのような告発状をだしたのだという説が広がった。vi

このような推測や噂が乱れ飛んでいた11月16日金曜日午前3時47分、テネシー州メンフィス市とアーカンサス州を隔てるミズリー河に架かるヘルナンド・デソト橋の上に無人の乗用車が放置されているという911緊急通報（日本の110番と同じ）が橋を通過中のトラックからあった。その後15分間の間に四回の同様の通報があった。急行した警官はミズリー州のプレートをつけた三菱ギャランが放置されているのを見つけた。エンジンは止まっていたが、キーは付けたままでガソリンも一杯であった。

警官がメンフィス国際空港のエイビスレンタカー事務所に問い合わせ、借主がマサチューセッツ州ケンブリッジに住むドン・ウイリー博士であることを突き止めた。彼はハーバード大学の教授で生物学を研究していた。教授はメンフィスにあるセントジュード小児医学研究所の毎年行なわれるアドバイザー会議に出席する為に、他のハーバード大学の同僚とともにメンフィスへ来ていたのである。

当日は離婚した前妻のカトリーヌが二人の子供を連れてくる事になっていて、ウイリー博士は四人でグレース島に行き週末を過ごすことにしていた。

15日の夜ウイリー教授は仲間とともにピーボディホテルでラグタイムのピアノ演奏を楽しみながら酒を二杯飲み干し、これからメンフィスの北にある父の家へ二十分ほどのドライブをするからとペリエ（ミネラウオーター）に切り替えた、とバーテンダーは証言した。バーテンダーの記憶ではウイリー教授は12時30分ごろホテルを去った。

そこから午前4時までの教授の足取りは消えてしまった。地元警察は街のバーのバーテンダーやトロリバスの運転手、そして街路清掃人あるいは売春婦などに聞きまわったがまったく手掛かりはなかった。ウイリー博士のクレジットカードの口座を調べたがその夜に使われた形跡はなかった。三菱ギャランの走行距離を調べたが長距離を走ってはいなかった。vii

ウイリー博士の専門が伝染病であった為にテロ犯による誘拐が疑われたが、AIDS、エボラ熱、ヘルペスおよびインフルエンザを研究していて炭疽病は専門外であった。ヘルナンド・デソト橋は交通量が非常に多く目立ち易いので誘拐には不向きな場所だと警察関係者は語った。警察は自殺の線もあると考えたが、遺書もなく財布も残されていず、自殺を証明することも難しかった。

ヘルナンド・デソト橋は、彼が行くといっていた父親の家とはまったく反対方向にあった。橋はメンフィス市から西へ向うインターステート40がミシシッピー河を渡るところにあり、その下流にはインターステート55のための橋がもう一本架かっていた。

ヘルナンド・デソト橋は1972年に完成した、M字型に二つのアーチが連なる優美な鉄橋で、一つのアーチのスパンが二七四メートルある。水面から路面までの高さは四十メートル近くあった。viii

ウイリー博士が最後に仲間といたピーボディホテルはインターステート 40 から一キロメートル程南側のミシシッピー河岸にあった。車で行けばホテルから橋までは数分の内に着いてしまう。12 時 30 分から午前 4 時まで博士は何処で何をしていたのだろうか。

ウイリー博士はジャック・ストロミンガー博士とともに免疫の研究を行い、ラスカー賞を含む数々の賞を受けていた。ウイリー博士はハーバード大学の教授であったが、ハワードヒューズ医学研究所と国立保健研究所の研究者でもあった。ハワードヒューズ医学研究所はマリランド州チェビー・チェースにあり、しばしば国防省との共同研究をしていた。また、ハーバード大学の同僚であるジョン・コリアー教授は炭疽病の研究を行っていた。このような事情を勘案すると、ウイリー博士がテロリストにとって価値がないという F B I 説はおかしいと異議を唱える人もいた。

12 月 20 日博士が失踪してから約五週間後、ルイジアナ州ビダリアのミュレイ水力発電所でミシシッピー河から材木を引き上げていたクレーンの運転手が水中に浮かぶ死体を見つけた。検視官がまだ死体に絡まりついていたシャツやズボンと共に死体をボートに引き上げると、ポケットから財布が現れた。財布の中にはウイリー博士の名前と住所が入っていたので、直ちにケンブリッジとハーバードに連絡を取り、それからメンフィスにも連絡した。

死体の発見現場はメンフィスから約 340 マイル (544 キロメートル) 下流になる。

死体は腐乱し始めていて、靴は履いていなかった。腕時計と指輪はまだ残っていた。財布には現金とキャッシュカードが入っていてワイシャツとズボンは引き裂かれていた。シャツの背は乾いていて、うつぶせ状態で流されたことを物語っていた。アルマーニのシャツのボタンは引きちぎられたのではなく、割れていた。

死体の傷は、体の右側に 22 箇所の骨折があり、左側には 15 ヶ所の骨折があった。脊柱は 4 箇所折れ、頭蓋骨も骨折していた。無くなっていた第三ボタンのあたりの胸骨はひびが入っていた。F B I はこの傷を橋からウイリー博士が転落したときに受けたと判断した。^{ix}

車を念入りに調査すると前方のバンパーに小さな傷があり、黄色の塗料と錆が付いていた。橋にはそれに対応するような傷はなかった。橋の手すりは約一メートルの高さで、車と手すりの間は 20 センチしかなかった。F B I の推論はウイリー博士がバンパーの傷を見ようと車外に出て、手すりを背に立ったところへ、18 輪トラックが通り掛かりその風圧で飛ばされたか、驚いた拍子によるめいて転落した、というものであった。

ミシシッピー河の流速は平均で 1.2 マイル/時間であるから、この速度で死体が流されたとすれば、ビダリアまでは 12 日ぐらいで流れ着いてしまう。本当にウイリー博士は 11 月 16 日に死亡したのか、誘拐された後どこかに監禁された後殺されて捨てられたという可能性はないのか、F B I は言及していない。^x

第三節 軍産癒着の疑惑

2001年12月14日、テトラヘドロン出版はホームページ上で、驚くべき記事を公表した。^{xi} それは「空気中の死：グローバリズム・テロリズムおよび毒物兵器」（2000年6月出版）という本の著者であるレオナルド・ホロビッツ博士がFBIに対して告発書を送り、バツテル研究所の二人の研究者が、もしこれ以上の審問をするというなら政府の極秘生物兵器開発プログラムを暴露すると脅した事件の徹底究明を依頼した、という内容だった。この二人とはウィリアム・パトリックⅢとロシアから亡命したカナトヤン・アリベコフでいずれもバツテル記念研究所のコンサルタントを勤め、CIAから給与を貰っている炭疽病の権威者であった。

炭疽菌入りの手紙を送った人物は、軍あるいはCIAの直接の関係者ではないにしても、その関係者であるというのがホロビッツ博士の主張だった。

ロビッツ博士はこれに先立って、11月12日に炭疽菌入りの手紙を送った犯人はCIAおよび製薬会社と関係がある人物であるという推測をしている。製薬会社とはアカンビス（オラバックスを吸収合併した）、バクスター、アベンティス、バイエル、メルク、ホッヘストの各社で、いずれも天然痘や炭疽病のワクチンを製造している。これ等の会社は製薬会社の団体である「医薬研究・製造社協会（PhRMA）」を通じてブッシュ政権に近づき、生物テロの危険性を軍・CIAと共に強調し、不当に高い価格でシプロなどの抗生物質やワクチンを国に売りつけたが、生物兵器テロの危機を煽り立てる目的で関係者が炭疽菌入りの手紙を送りつけた、というのがホロビッツ博士の主張である。

ホロビッツ博士の指摘は第二次大戦前に遡って、製薬会社と米国の関係を指摘しているが此処では1970年代以降の指摘部分を箇条書きにする。

- 1、米軍は第二次大戦以後英国と共に炭疽菌や天然痘及び類似の病菌や化学物質を兵器として用いる化学生物兵器（CBW）を研究していた。1972年に化学生物兵器条約に調印し、それらの製造を中止したと宣言した。しかし、それにも拘らず、実はバツテル研究所はCIAから委託され、生物兵器研究・開発・試験を行なう「化学・生物・情報分析センター」をオハイオ州ウエストジェファーソンとユタ州ダグウェイ・ブルービング・グラウンドにもち、Ames種の炭疽菌粉末化を進めていた。
- 2、一方では保健衛生省（HHS）がこのような化学生物兵器に対抗する為の、ワクチンや抗生物質の開発に多額の開発費を投じていた。この開発は1997年に炭素菌入りの培養器がワシントンに住むブナイ・ブリス宛てに送られてきたときからはじまった。1998年には生物兵器テロ対策費が14億ドル（約1540億円）に達していた。
- 3、軍と製薬会社の癒着はバイオポート社の事例がある。バイオポート社は炭疽病ワクチンの主たる供給者である。同社は1998年に国立のミシガン・生物製品研究所から不採算の炭疽病ワクチンのビジネスを買い取った。その後一ヶ月も経たぬうちに国防省から「炭疽病ワクチンの製造・試験・梱包」契約を貰い290億ドルに上る金額を受け取った。クリントン大統領の顧問で先の統合参謀本部議長であったウィリアムクロー元提督は、英国大使の職から戻

って早々にファウド・エル・ヒビリと共にバイオポート社を設立した。彼は自分自身では一銭の投資もしていないにも拘らず、この商談成立の見返りとしてバイオポートの株の22.5%を手に入れた。バイオポート社の大株主ファウド・エル・ヒビリはビン・ラディン一族と親しい関係にあった。

- 4、1980年代の初めに英国のポートンダウン研究施設の一部「微生物利用研究センター（CARM）」が私有化され、ポートン・インターナショナルとなった。1990年の初めにファウド・エル・ヒビリが同社の株主となった。そしてサウジアラビア向けの炭疽病ワクチンを入手する窓口となった。1997年に米国国防省はディンポート社と三億ドルの生物兵器防御の契約を結んだが、同社はポートン・インターナショナルと米国のディンコープのジョイント・ベンチャーであった。
- 5、バイエルとメルクは「医薬研究・製造業協会（PhRMA）」に加入し、協会内の生物テロ・タスクフォースの有力なメンバーであった。2000年7月にバイエルは炭疽病の治療薬としてシプロの認可を米国食品医薬局（FDA）から受けた。その時点でバイエルはまだシプロの十分な試験を行なっていなかったし、副作用がどれほどあるかも確認されていない高価なシプロをFDAが認めたことは疑問を感じる。
- 6、バツテル研究所とバイオポート社は財政・経営面で米国の国家安全保障担当者及び米国・英国の国防関係者とつながっていて、「ワクチン共同取得プログラム」に関わっていた。
- 7、2001年9月7日にアソシエイテッド・プレスは、米国のある研究機関が生物兵器開発契約のもとで致死性が非常に高い新しい炭疽菌種を開発した、と報じた。これはウイリアム・パトリックが1グラム当たり 10^9 個の胞芽を含む炭疽菌の粉末化に成功した、と報告している事に合致する。手紙に入っていた炭疽菌の細かさについては情報がないが、パトリック氏を尋問する価値はある。
- 8、結論として、米国ブッシュ政権及びCIAの高官と英国政府が炭疽菌の兵器化に深く関与していた為に、FBIは犯人の割り出しを引き伸ばしている。

以上がホロビッツ博士の主張するおよその内容である。

ところでバイオポート社にまつわる怪しげな事件がもう一つある。それは炭疽菌入り手紙事件の伏線としては見逃せない事件である。

2000年2月28日の朝、バイオフテム社の会長ジェームズ・パトリック・リーレイはニューポートビーチの家を出てアーバインの事務所の駐車場に10時ごろ着いた。車を駐車して事務所向いビルの入り口に着いた途端、黒いフードをかぶった男が突然近づき顔に銃をつきつけ発射した。弾は頬を突きぬけ頬骨を削って唇の上から飛び出し、そばの銀行の窓に当たった。銃撃犯は逃げ去ったが、銃声を聞いて飛び出した人に目撃された。

傷ついたリーレイ氏は携帯電話でパートナーのフォード博士に助けを求めた。彼は当時、事務所に居たがすぐに駆けつけた。

目撃者の情報から、銃撃犯が飛び乗って逃げたバンの持ち主はディノ・ダザックというフォード博士の税務コンサルタントであることが判明した。彼は銃撃事件との関わりを否定したが、その日の朝フォード博士と電話で話しをしたことは否定しなかった。

フォード博士の家を捜索すると、数丁のライフル銃と散弾銃が発見され、押入れや床下から更に数百発のライフル銃弾が発見され、これ等の銃器は押収され博士は事件との関わりについて尋問を受けた。^{xii}

ところが、三月初めにフォード博士は散弾銃で撃たれ死んでいるのが発見された。銃器が押収されて、本人は散弾銃を所持していなかったにも拘らず警察は自殺と判断した。

2000年3月9日捜査当局はカリフォルニア州アーバインのラリー・フォード博士の家の裏庭から怪しげな缶を六個掘り出した。フォード博士の死後、家族の一人が警察に対し、博士が武器と微生物を缶に入れて裏庭に埋めたことを告げたのである。

6個の白いプラスチック缶は一メートルほどの地下に埋められていた。警察はオレンジ郡の保安官事務所から運んできたロボットを使って缶を引き上げ、その場でX線透視を行なった後試験所へ運び込み蓋を開けたが、内容物は人体に害を及ぼすものとは判断できなかった。続いて21個の缶が掘り出されたがその中には数千発のライフル銃弾と機関銃弾の実装された弾帯が入っていた。

その後の調べでかつて南アフリカ共和国のアパルトヘイト時代の人権蹂躞事件を捜査していた「真実と和解委員会（TRC）」が、フォード博士が南アフリカ共和国軍のために非公式コンサルタントとして生物兵器開発プログラムに関与していた疑いをもっていたこと、また、事実フォード博士がCIAとコンサルタントとして関係が有ったことが判明した。さらに、フォード博士は死ぬ前にバイオポート社と接触していて、海外で仕事をする為に引っ越し準備をしていたことが分かった。バイオポート社がなんのために、フォード博士と接触していたのか、フォード博士は何を恐れて大量の兵器を隠匿していたのか明らかにはされていない。しかし、バイオポート社がCIAや南アフリカ共和国軍と関係を持った生物学者を海外で使おうとしていたことは確かである。

第四節 スティーブン・ハットフィル博士

2002年8月にジャーナリストの話題に突如として一人の被疑者の名前が浮上した。スティーブン・ハットフィル博士がその人である。FBIは八月一日にハットフィル博士のマリランド州フレデリックのアパートメントに捜査に入り、証拠品を押収した。FBIはすでに六月にハットフィル博士の尋問を行なっていた。そのときには何等怪しむべき証拠はなく、報道関係に捜査の事実が漏れることもなく終わった。しかし、七月末になって、ハットフィル博士のアパートを見張っていた捜査チームから、ハットフィル博士が裏庭のゴミ箱に沢山の物を放り込んでいると

の報告があり、証拠隠滅の恐れありと判断したF B Iは公開捜査に踏み切ったのである。この捜査の状況はテレビで報道された。 xiii

8月11日にハットフィル博士は弁護士と共に記者会見をおこなった。博士はF B Iが自分を「関心の対象」とよび、公開捜査したことにより自分の人生は破壊されたと訴えた。A Pニュースが要約したF B Iの嫌疑は以下の通りである。

- 炭疽菌入り手紙の返信住所は「ニュージャージー州グリーンデール学校」となっていた。ハットフィル博士は過去にジンバブエのハラレに住んでいたが、その付近のグリーンデールに学校があった。この学校名を使ったのではないか。
- ハットフィル博士のコンピューターに生物兵器を使ったテロの小説の下書きがあった。実際に起こった事件と酷似した炭疽菌による議院襲撃事件を描いている。
- 1999年に軍の契約の下でフォートデトリック働いていたときに、炭疽菌を手紙で送たらどうなるかという報告書作成を受託した。
- 警察犬による手紙に残留した匂いの検査をハットフィル博士のアパートで行なったとき、犬が反応を示した。
- ハットフィル博士がS A I C (サイエンス・アプリケーション・インターナショナル：生物戦防御の研究を米国政府から請け負っている研究所)で南アフリカ時代の活動について質問されたとき、嘘発見器検査を通ることができず解雇された。この試験は同研究所の職員に守秘義務の資格を与える為に行なわれた。

これらの疑惑に対し、ハットフィル博士の弁護士は逐一反論した。

- ダッシュル上院議員とリーヒー上院議員あての炭疽菌入り手紙は二通とも同じ返信先が書かれていた。

四年生

グリーンデール小学校

フランクリンパーク

ニュージャージー、08852

- 炭疽菌入りの手紙が投函された郵便ポストはプリンストン市街の商業地域で、ナッソー通りのプリンストン銀行の角にある。ナッソー通り（ルート27）を北に一五マイルほど行くとフランクリンパークがあり、ルート27から0.5マイルほど外れたところにグリーンブルック小学校がある。グリーンデールという名前はありふれた名前で、犯人はこの付近に土地勘があり、グリーンブルックからグリーンデールを思いついたのではないか。ハラレ近郊のグリーンデールの学校はコートニー・セロース小学校と呼ばれていた。
- ハットフィル博士の書いていた小説は数年も前のもので、それを読んだ第三者によれば、狂牛病と腺ペストを中心とした筋書きで炭疽菌については書かれていない。
- フォートデトリックでの炭疽菌入り手紙の研究は、ウィリアム・パトリックが行なっていた。C I Aの指示でハットフィル博士はジョセフ・ソウカップと共にS A I Cの雇用者とし

てこの仕事を手伝っていた。それ以前の仕事ではバクテリアの研究とウイルスの研究分野は物理的にも分離されていた。ハットフィル博士はウイルスを研究していてバクテリアが専門ではない（炭疽菌はバクテリアである）。

- 炭疽菌入りの手紙は消毒され、しかも一年近くたっているのに、犬の嗅覚試験に役立つものではない。
- S A I Cがハットフィル博士を解雇したのは守秘義務資格の為ではない。元来ハットフィル博士の任務は高度な守秘義務を必要とするものではなかった。ハットフィル博士が研究員を解雇された後、S A I C社は博士とコンサルタントとして契約を結びたいと申し出た。しかし、博士はルイジアナ州立大学でバイオテロ対策を警察と州の関係者に教えることで年額十五万ドルの契約を結んだのである。この契約は、F B Iが二度目の公開捜査に踏み切った為、解約となってしまった。

ハットフィル博士の過去の経歴には多少の謎がある。彼はミズリー州のセントルイスで生まれ、イリノイ州マツーンの高等学校を卒業した。つぎにカンサス州ウインフィールドのサウスウエスタン・カレッジで基礎生物学と化学を学んだ。1975年6月カレッジを卒業すると三年の軍務につき、軍務が終わると同時に南アフリカへ移り十六年を過ごした。最初の六年はハラレでジンバブエ大学に入り医学の学位を取得した。その後十年医学研究を続け、「遺伝子」、「医療生物化学および放射線生物学」、「血液病理学」の三つのマスター学位を取得した。1994年の夏にアフリカを離れ、一年間オックスフォード大学で医学研究に従事した後米国に帰った。

ハットフィル博士はローデシア及びジンバブエに居住し、軍隊経験と戦闘経験を売り物にし、どちらかの国の軍隊と予備役およびコンサルタントという関係を結んだ。いずれの軍隊も白人上位国家で黒人を圧迫した事実があるため、ハットフィル博士は人種差別主義者が病原菌で黒人を殺すのを助けた、という噂が立てられた。

2003年8月にハットフィル博士はアッシュクロフト司法長官とF B Iを相手取り、炭疽菌入り手紙の犯人として名前を挙げられたために、プライバシーを侵害され、職を失ったとの理由で告訴した。2004年三月に裁判所はこの告訴の審議を六ヶ月延期することを決定した。理由はF B Iの炭疽菌入り手紙の捜査に進展があったという秘密報告がF B Iから出された為であるという。xiv

i One Anthrax Answer: Ames Strain Not From Iowa
<http://www.ph.ucla.edu/epi/bioter/anthrzzamesnotiowa.html>

ii The Ames Strain
<http://www.ph.ucla.edu/epi/bioter/theamesstrain.html>

iii Biological Warfare
<http://biologydaily.com/biology/Bioweapon>

-
- iv Gruinard island
http://www.anoca.org/test/gruinard_island.html
 - v U.S. Senate Committee on Banking, Housing and urban Development
<http://www.gulfwarvets.com/arison/banking.htm>
 - vi FBI Closes in on Anthrax Terrorist, Prime Suspect is Zionist, by Hector Carreon
<http://aztlan.net/zack.htm>
 - vii What Happened to Don Wiley?, By Doug Most
<http://www.bostonmagazine.com/ArticleDisplay.php?id=80&print=yes>
 - viii Memphis braces for a lot of Shaking
http://www.findarticles.com/p/articles/mi_m3724/is_4_67/ai_113601970
 - ix What happened to Don Wiley?, by Doug Most
<http://www.bostonmagazine.com/ArticleDisplay.php?id=80&print=yes>
 - x The Deth of Dr. Wiley-‘Murder, They Wrote’, by Wayne Madeson
http://www.rense.com/general25/thedeathof_wiley.htm
 - xi The CIA’s Role in the Anthrax Mailings: Could Our Spies be Agent for Military-Industry Sabotage, Terrorism, and Even Population Control?
http://www.tetorahedorn.org/articles/anthrax_espionage.html
 - xii The Mysterious Dr. Ford, by Rachael Bell
http://www.crimelibrary.com/terrorist_spies/terrorist/larry_ford/1.html
 - xiii The Hunting of Steven J. Hathill
<http://www.ph.ucla.edu/epi/bioter/huntinghathill.html>
 - xiv Judge postponed Hatfill’s lawsuit, by Scott Shane, Sun Natinal Stuff
<http://www.baltimoresun.com/news/nationworld/bal-te.hatfill30mar30.0.5945839.print.story=bal-nationworld-headlines>